

自治会	自治会名	大屋自治会						
	自治会 拠点住所	上田市大屋 5 0 3						
	U R L							
	拠点施設名 ※公民館、 自治会館など	大屋公民館						
	世 帯 数 該当世帯数に○印	50 未満	100 以下	250 以下	500 以下	750 以下	1,000 以下	1,000 以上
自治会の紹介 位置や沿革、 成り立ち、 昔話など	1. 大屋地区の発展 上田市の東端に位置する大屋は千曲川の流れ、北国街道、鉄道、国道などによる交通によって集落の位置は変わっていきました。そして、文政 10 年(1827 年)45 戸、男性 79 人、女性 93 人、計 172 人の人口は令和 3 年(2021 年)11 月には 766 戸、男性 775 人、女性 800 人、計 1,575 人が住む地域に発展しています。 上田市立博物館に所蔵されています「松平神社文書」によりますと、大屋村熊野大明神と記された現大屋神社よりも南側に北国街道が通っていました。大屋の集落は現大屋神社より西の街道ばたに並んでいました。この集落のあった位置が、千曲川の川添えの古屋敷と呼ばれているところです。 寛永以後の江戸時代の千曲川の流れは変わり、それまで熊野明神(現大屋神社)の南側を通っていた道は高台の熊野明神の北側(現大屋駅前を通る北国街道)に移され、今の信用金庫の西の地点で段丘をおりて瀬沢口をぬけ岩下へぬける弓なりの道に変わりました。加えて度重なる洪水により古屋敷に集まり住んでいた人々は今の駅前を東西に走っている通りへ移転してきました。居屋敷と呼ばれているところです。 明治 29 年(1896 年)信越線大屋駅開業以後、大屋の集落はまた新しい役割を持つようになりました。大屋駅から汽車に乗る依田窪地域や神川以東和村あたりの人達、丸子を中心に生産された製糸工場が集める繭と生産した生糸の輸送、これらの人と物資は年ごとに増加しました。大屋駅前は商店街となり交通や商業を通して、近隣数か村の中心的な街になっていきました。 昭和 27 年(1952 年)、上田・田中間の国道 18 号線が完成しました。国道 18 号線の開通に伴い、鉄道よりも山奥から市街地の通りの隅々まで道さえあれば走れるバスの方が珍重されるようになっていきました。又チェーンストア、スーパーマーケット、デパートや高級品を並べる専門店が次第に上田市街に建ち並び、大屋駅前の商店街の客は上田市街地に足を運ぶようになり、バスの交通便利はその動きを加速させました。							

昭和 35 年(1960 年)池田総理の所得倍増政策以後、第二次、第三次産業の人口が増加し、国道 18 号線によって、都市近郊に農地を宅地化して新しい住宅が作られ、また大小の工場が誘致されて、大屋は住宅地域兼工業地域になり発展し、今日に至っています。(写真右)



2. 大屋の沿革

① 大屋村

古文書の中で『大屋』の地名は、永禄 9 年(1566 年)武田信玄の「諏訪上社大宮御門屋造宮再興次第」の中で初めて表れました。大屋は、海野十二郷(岩下、吉田、上青木、林、大屋、小井田、漆戸、下青木、東上田、田沢、大河、開善寺)のひとつの郷であり、大屋村は水田の多い郷村として成立していました。

② 合併により神川村

明治 22 年(1889 年)4 月 1 日、大屋村が市制町村制に伴い、蒼久保村、岩下村、国分村と合併して神川村になりました。

③ 合併により上田市大屋

昭和 27 年(1952 年)8 月の法律から地方公共団体の規模の適正化をはかることが促進されました。さらに昭和 28 年(1953 年)10 月 1 日、町村合併促進法が施行され、これに伴い村議、村民の話し合いの結果、村民多数の賛成の下、神川村は昭和 31 年(1956 年)9 月 30 日上田市へ編入合併し、神川村大屋は上田市大屋になりました。

3. 北国街道と大屋橋

昔から大屋は交通の要でした。

江戸時代に入り、北国街道の交通量増大につれて、大屋は千曲川の川渡りの場所として、その責任を負う立場に立たされてきました。上田御城下と武石領、依田窪地方の幕府領と江戸との連絡、物資の運搬には欠くことの出来ない重要な場所になりました。

江戸前期は今の大石橋とほぼ同位置で、古屋敷から石井へ渡りましたが洪水による集落の移転に伴って、渡河点も古屋敷のところから大屋の東端、仁王様の前に移動しました。その後大屋駅の開業により現在の位置に変わりました。

記録の上では元禄、享保、寛政、享和、文政、慶応に土橋がかけられていましたが苦勞をして橋をかけても、ひとたび洪水あると、跡形もなく流されてしまう繰り返しでした。洪水との戦いでしたが大屋住民の大屋橋への思いには、熱いものがありました。

① 刎橋(はねばし)

堀村の山辺忠七が世にも珍しいはね橋の工法を学び、無尽をたて、私財を投じ、慶応 3 年(1867 年)9 月に完成、渡り初めを行い、お祝いしました。しかし橋のめずらしさに群衆が詰めかけすぎて、はね橋は支えきれず、その日のうちに落橋するという大惨事を招いてしまいました。

② 舟橋

両岸に三脚型の組み木を埋め、その間を綱で結び、その綱に 17 隻の船を結び並べ、船から船に板を渡して橋にしました。洪水で船を流す等大損害を受けることもありましたが、明治 26 年(1893 年)の木橋が出来るまでの 20 年間維持しました。

③ 木橋

明治 26 年(1893 年)、長さ 75 間(136 メートル)の橋がかけられました。しかしこの立派な橋も明治 29 年(1896 年)の大洪水で大屋側の橋脚が流されてしまいました。そこで急ぎ大屋神社より下流 90 メートルのところにつり橋をかけましたが、これも 1 か月ほどで流されてしまいました。

④ 木鉄混合橋

大屋駅の開業と丸子や大屋の製糸輸送等交通の重要性を考え、大屋駅の南に新しく道路をあげ、その先に大屋橋をかける構想をたてました。明治 33 年(1900 年)に起工し翌々明治 35 年(1902 年)に完成しました。技術の進歩もあって、橋台はコンクリートで作られ、その上に煉瓦積みとしました。橋板を除き木材はケヤキ材を用い、鉄も使用、木鉄混交のハウトラス式構造の橋が出来上がりました。以後大屋橋が流出することはなくなりました。



⑤ 鉄橋

昭和 4 年(1929 年)には、鉄橋がかけられました。空前の祝賀行事も行われ、大屋と周辺町村の人々はたいへんな喜びようで、一般の見物には 5 万人を数えたとのことでした。(写真 右上と右)

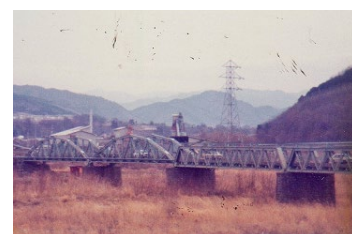
この後、自動車が増加し、さらに車の大型化で橋幅が狭くなったので、昭和 48 年(1973 年)、現在の幅の広い橋がかけられました。(新大屋橋)



4. 交通の要所、大屋のもう一つの橋

大屋地区と対岸の石井地区の千曲川に架かる橋に大石橋があります。上田市に架かる永久橋としては上田橋・大屋橋について 3 番目の橋です。

大正 7 年(1918 年) 上田丸子電鉄線、上田東一丸子町間が開業、以来 52 年間、依田窪地方の人々を東京・長野・上田方面に結んでいましたがバス交通が盛んとなり、昭和 44 年(1969 年)4 月廃止になりました。その後、線路は道路に活用され、鉄道の鉄橋も昭和 46 年(1971 年 9 月)道路橋になりました。(写真 右上)、平成 13 年(2001 年)9 月、台風により橋の一部が破損、平成 16 年(2004 年)対面交差の普通道路として再建され、今日に至っています。(写真 右)



5. 大屋の神社、仏閣、遺産、遺跡など

① 大屋神社

大屋駅前から千曲川へ歩いて 1 分、大屋神社があります。地域と住民の安寧を祈願する

大屋神社の祭典は宮司と住民による氏子から選任された委員で執り行われています。昔は多くの祭典を執り行っていたが今は春と夏の例祭、元始祭および大祓祭並びに二年参り祭を執り行っています。(写真 右)



明治 26 年(1893 年)東京角力年寄の浦風林右衛門より大屋神社の祭典に、四本柱の土俵を作り、相撲をと

ることを許可され、長く大屋神社の祭りに相撲大会「大屋角力」が催されたとの記録があります。

近年までお祭りには屋台が出て、子どもたちの楽しみでありましたが今は屋台は無く、叉木の提灯がお祭りの雰囲気を漂わせるだけになっています。(写真 右)



村人の崇敬するお宮がいつからあったのかは分かっていませんが北国街道に面した古い鳥居は明神形で江戸時代中期の寛延元年(西暦 1748 年)に建てられたことよりお宮はそれ以前からあり、周辺には樹木が茂っていたものと推測されます。

その後、江戸時代後期の天保 13 年(1842 年)、新たに神明宮本殿と熊野大権現の本殿が二社並び建てられていたと言われております。

明治 4 年(1871 年)新政府の社格決定の政策が進められ、明治 6 年(1873 年)に「村社」と決定されました。以前は熊野神社と呼ばれていましたが氏子が住むところの「大屋」を冠して、明治 11 年(1878 年)11 月に許可を受けて「大屋神社」と称することになりました。

この由緒ある神社が明治 31 年(1898 年)1 月 28 日、祝融の災(火災)に遭い、本殿、拝殿、神楽殿などすべての建物が焼失しました。直ちに氏子一同に寄付を募り、復興に奔走され、3 年後の明治 34 年(1901 年)5 月 1 日現在の神社が再建落成され、この年から本殿が一棟となりました。

明治 34 年(1901 年)、大屋より丸子方面への千曲川渡河道路が変更になり、現大屋駅より千曲川に橋を架け石井に渡ることになりました。このため、神社境内の東面に道が開け、これより参詣するため大正 4 年(1915 年)11 月、花崗岩・微細手斧打、鳥木形の新しい大鳥居が東側に建設され、神社正面は東側になりました。

境内には今刀平社、雨降社、三峰社、水神社、天神社、大山祈社、社宮社、稻荷社、三島社、疱瘡守社の十の末社があり国土開拓の神、五穀豊穡の神、火災除けの神、水難除けの神、疫病除けの神、学問の神、縁結びの神、商売繁盛の神々が祀られています。

② 高尾山穂見神社(白鳥穂見神社)

大正 11 年(1922 年)大屋字坪の内の山林の上の高台に大屋公園を築きました。そして大正 12 年(1923 年)、穂見神社をお祀りするために鎮座の工事やのぼりを作るなどを準備して、大正 13 年(1924 年)4 月、大屋商工会有志のはからいにより県社高尾山穂見神社(山梨県中巨摩群檜形町)の祭神を分祀しました。昭和 18 年 4 月大屋字枳立(からたち)にありました白鳥神社を穂見神社に移祀し、以後、白鳥穂見神社と改称しました。(写真 右)



山梨県の穂見神社は、延喜式神明帳にもある古い神社です。文治 3 年(1187 年)の古碑や天福元年(1233 年)の縣仏(御正躰)等も保存し、由緒深く、高尾山にあります。古くは高尾山稲荷社とか、御埼明神ともよばれ、一般には高尾山で知られています。五穀豊穰、養蚕守護の神として山梨・長野に信仰が厚く、近世からは商売繁盛の神として崇敬されるようになった神社です。

③ 王尊御堂

大屋仁王尊が、いつ、誰が建立したかは詳らかではありませんが、慶安 4 年(1651 年)、三代将軍家光の時代、「大屋村田畑御検地帳」の中に「仁王畑」の地名があります。又宝永 3 年(1706 年)、新しく上田藩主になった松平忠周に差し出された「大屋差出帳」に熊野社、伊勢社、枳立明神、観音堂、阿弥陀堂などと共に「仁王堂」の地名が記されています。このことから、仁王尊は阿弥陀如来又は観音菩薩の守護力士として存在したことが推測されます。

寛保 2 年(1742 年)、大洪水により仁王尊は千曲川転落流失し、慶応 3 年(1867 年)山辺忠七が架橋工事中に川底より仁王尊を発見して拾い上げたとの言い伝えはあります。しかし現存する仁王尊の損傷の具合から見て、125 年間の長い間、川底に在ったものとは考えられず、洪水に見舞われた阿弥陀堂や観音堂を復元する余裕はなく、仁王尊のみが北国街道沿いに安置され現在に至ったと推測されています。



長い年月により仁王尊の本体は傾き、昭和 11 年(1936 年)10 月、再建改築委員会を結成し、仁王尊御堂を改築、加えて落成祭典が執り行われました。(写真 右)

④ 大屋駅

大屋駅は日本初の請願駅です。(写真 右下) 請願駅とは地方自治体・地元住民・新駅周辺企業等の要望により開設された鉄道駅です。大屋駅前に明治 36 年(1903 年)に建立された大屋駅設置記念碑があり、当時のことが記載されています。

1888 年(明治 21 年)に直江津、軽井沢間の信越本線が開通すると、諏訪地域の蚕糸業者は和田峠を越えて信越本線の田中駅まで陸送するようになりました。しかし諏訪地域から田中駅までは遠く不便であったため、上田駅と田中駅の間の大屋駅の開業を丸子の蚕糸業者と一緒に運動しました。大屋駅の



開業は生糸の輸出港である横浜までの輸送時間が短縮され、輸出相場に対応した出荷が可能となったと言われていました。

こうした生糸輸送をめぐる大屋駅が持つ歴史的意義について、日本の産業近代化に貢献した産業遺産としての価値を持っていると評価されました。2007 年（平成 19 年）に上田市の製糸関連遺産として信州大学繊維学部講堂などと共に、経済産業省の近代化産業遺産に認定されました。

⑤ 東郷、伊藤、上村三将軍乗船した木造小舟

日露戦争終結の後、明治 39 年(1906 年)5 月、連合艦隊司令長東郷平八郎元帥、伊藤祐亭海軍元帥、上村彦之丞海軍大将(当時中将)の三将軍が、大屋にそろって見えられ、依田川尻より千曲川を木造小舟で渡られ、外河原の築漁場にて遊船されました。三将軍が艦船と一緒に坐乗したことはなく、「三将軍が一時に坐乗したる船は他に例なし。」として、この小舟を、大屋神社に寄付されました。今は大屋神社右側の壁に飾られています。(写真 右)



6. 大屋の昔話、伝説

① 猫石

大屋地域の千曲川の中に、推定重量 180 トンもある大きな石がありました。猫石の話はこの石にまつわる言い伝えです。

昔、信濃の国には「もみじ」という賊がいて、人を殺したり、物を盗んだり、悪いことの限りを尽くしていました。そこでこれを聞いた平維茂(たいらのこれもち)は「もみじ」を退治するため都からやってきましたが千曲川の水量が多くて、渡れません。するとどこからともなく大きな猫がやってきて、川に飛び込み浅瀬をさぐって案内してくれました。しかし猫は帰る途中力つき、息絶えてしまいました。大石橋の下の大きな猫の形をした石は、その猫が死んで石になったと言われ「猫石」と呼ばれていました。しかし今はありません。大屋区民にとってたいへん思い入れの深い石でしたが大石橋架け替え工事に伴い、平成 15 年(2003 年)1 月 29 日に破砕撤去されました。今は、その一部を大屋神社境内に祭り、区内の平安と河川の平穏を祈願しています。(写真 右上)



② 駒つなぎの松

猫に助けられ千曲川を渡った平維茂(たいらのこれもち)は猫の死を悼み、千曲川がよく見える小高い丘の松の木に馬をつなぎ、猫にむかって手を合わせ、心からお礼を言うのでした。昭和の初期に焼けてしまいましたが尾撫(おなで)へのぼる途中に 1 本の松がありました。この松が「駒つなぎの松」と言われていました。

③ あまごい地蔵

下青木から大屋村へ行く道は雑木林が続いていました。夕方のことでした。与一さんが隣村へ用事に行った帰り、突然目の前に小柄なおじいさんが現われ、「おうい、しょってけや。」と

声を掛けてきました。「いいともさ、おじいさん。」気さくな与一さんは、おじいさんを背負い歩き始めました。ところが小柄なおじいさんにしては、とても重いのです。なかなか大屋村に着きません。いつの間にか、東の空は明るくなってしまいました。「おかしいな。」と思った与一さんは、おじいさんを田んぼのあぜ道におろしました。見るとそれは、何と大きな黒い石でした。翌日は平作さんも同じ目に遭いました。背中のおじいさんは「来年は日照りだど、しっかり踏めや。」と持っている杖で平作さんのお尻をポンポンと叩くのでした。おろすと黒い石でした。多くの村人が与一さん、平作さんと同じ目に遭い、「尾撫に住む悪い狸に違いない。何とかしなければ。」村人たちは狸の住みかを探しました。しかし分かりません。そこで、田んぼに座っている黒い石を縄で縛りあげ、大勢で瀬沢川に引きずって行って放り込みました。すると雨が降ってきました。雨は一晩中降り続き、朝に雨は上がるとその晩また誰かが黒い石を背負って歩かれ、黒い石は田んぼのあちこちに位置を変えて座っていました。

ある日のこと、村の長老が急に「来年は、本当に日照りになるかも知れないぞ。みんなが石を背負って歩かせられたところは、土の柔らかなあぜ道や用水のふちばかり。これは、きっと神様の、『日照りに備えて、水もれするところをふさげよ。』というお告げかも知れないぞ。」と言い出しました。村人たちは全力を挙げてせんげ普請を行い、春の田植えを迎えました。その年は空梅雨、一番大切な出穂の時期に干ばつ、村人たちは深いため息をつくのでした。その時、「去年の暮れに、あの狸の石を瀬沢川に放り込んだら、土砂降りの雨になったのではないか。もう一度放り込んでみようではないか。」と言い出しました。黒い石を縄で縛り、瀬沢川べりに引きずって行きました。けれど川はすっかり枯れていて、千曲川まで引きずって行って、「どうぞお狸様、去年のように、雨を降らせてください。」と皆で手を合わせて拝み、川へ放り込みました。

奇跡が起こりました。その夜更けから大雨になりました。吉田せんげは濁流となって、すべての田を潤しました。やがて実りの秋を迎えました。豊作になりました。千曲川から引き上げられた黒い石は、村の中央に築かれた大上に、村人の手で丁寧な祀られました。そして「お助け地蔵尊」、「雨ごい地蔵尊」と呼ばれるようになりました。

④ 石梨の話

人々には昔から「大屋の石梨」といって、欲張りをいましめる話が語り伝えられています。雨ごい地蔵尊の話の中のおじいさんが持っていた杖から芽が出て、その芽が小枝になり、やがて梨の木になりました。秋になると毎年甘い実をつけるようになりました。ここには、おたね婆さんが住んでいましたがおたね婆さんはたいへんな欲張りでした。梨が実ると婆さんは一つ残らず実を採り、近所の子供にも、誰にもくれようとしなかったのです。

ある年の実の熟れた日、きたないなりをした旅の僧が通りかかりました。僧はおたね婆さんに梨をひとつ恵んで欲しいとお願いしました。おたね婆さんはきたない僧には払えないと思い、ひとつ一両なら分けても良いと答えました。意外にも僧は梨を欲しがっている近所の子どもの分として、十個、十両の小判を差し出しました。それを見て、欲張りなおたね婆さんは値をつりあげてきました。百両でなければ売らないと。僧は百両の小判を差し出しました。おたね婆さんは更に値をつりあげてきました。「なあ、坊さんや、ここになっている梨をみんなやるか

ら、千両で手をうたんかね。そうだ、それ以外の話には、わしゃのらないよ。」、僧は「みなで千両か。もっともじゃ。じゃがのう、そんな大金は今持っていない。寺へ帰って持ってくるからな、他の誰にもとられぬよう、見張りをしておくれ。」と言って、帰って行きました。

翌日、僧は荷車に千両箱をもってやってきました。おたね婆さんは大喜び、梨の実を採り始めました。けれどどうしたことでしょう。あれほど香り高くみずみずしく実っていたはずの梨の実、ひとつ残らず石のように固くなってしまい、食べられる実は一つもありません。僧は「こんな梨にはお金は払えぬなあ。いい実がなったら知らせておくれ。また買いに来るでな。」と言って、荷車を引いて、どこへともなく行ってしまいました。

それ以来、梨の木は毎年花を咲かせますが、石のように硬い小さな実がつくだけでした。おたね婆さんの家は、跡継ぎもなく絶えてしまいました。

硬い実のなる梨の大樹は、村の小高いところに昭和のはじめ頃まで立っていましたが枯れてしまいました。

7. 冊子「大屋の民話」

大屋の昔話、伝説については冊子「大屋の民話」を参考にさせていただきました。

8. 大屋の偉人

山本 鼎(かなえ)は大屋が誇れる偉人です。

令和 3 年 10 月 14 日、上田市長はじめ神川・山本鼎の会、神川まちづくり委員会、大屋自治会、しなの鉄道株式会社の代表の皆さんが集まり、しなの鉄道大屋駅近くに設置した「日本農民美術研究所」の紹介看板の除幕式を行いました。あらためて山本鼎の業績を称えました。(写真 右)



以下が紹介看板に記載されています。

- ・ 版画家で画家の山本鼎は 1882 年(明治 15 年)10 月 14 日愛知県岡崎で生まれました。父・一郎は東京で西洋医学の修業をしており、5 歳になった鼎は母と上京します。小学校卒業後には木版工房で修業し、その後、東京美術学校(現・東京芸術大学)で西洋画を学びました。
- ・ 修業を終えた一郎は、信越線大屋駅北側の丘陵に山本医院を開業したため、神川村大屋は鼎の第二の故郷となります。
- ・ 鼎は 1912 年(明治 45 年)パリに留学し、4 年間版画や油絵を学びました。パリからの帰路モスクワに滞在。この間に「児童自由画運動」と「農民美術運動」への信念をもって帰国します。
- ・ 帰国翌年(1917 年)、鼎は大屋で金井正、山越脩蔵に自由画と農民美術の構想を伝えます。共感した二人は支援を約束。1919 年(大正 8 年)4 月 27 日、神川小学校で「第一回児童自由画展」を開催、12 月「日本農民美術練習所」を開講、活動は全国に広まりました。
- ・ 鼎は資金集めに奔走し 1923 年(大正 12 年)、大屋の山本医院のすぐ近くに、念願の「日本農民美術研究所」を建てます。設計者は「分離派建築家」の滝澤真弓(松本市出身)。大屋駅北側にそびえる三階建・三角屋根の研究所は、農民美術運動の拠点として全国に注目を集めるようになります。

	・ 「日本農民美術研究所」では、農閑期の農民を集め、山本鼎らの指導で木製の人形や皿、草木染などの工芸品を作りました。それらを売って副収入を得る事と、工芸品を作る喜びを農民たちに教えていったのです。農民たちが作った素朴な美術工芸品は、「農民美術」という名で大正デモクラシーという自由な思想の風に乗り全国に広まってきました。この研究所は、資金難で 1939 年(昭和 14 年)に閉鎖され、建物は 1955 年(昭和 30 年)に取り壊されました。 ・ 山本鼎は多くの芸術家・文化人と交流し、下記著名人は特に大屋駅を利用しました。画家：石井柏亭、石井鶴三、小杉放庵、倉田白羊、村山槐多、村山桂次。詩人：北原白秋、歌人：若山牧水。ロシア文学者：片上伸 8. 公共施設 (ア)大屋公民館 大屋神社の北側にあり、現在の建屋は昭和 33 年(1958 年)建設、昭和 47 年(1972 年)に増築されています。(写真 右) 老朽化と使い勝手の改善などにより新たな建屋を検討しています。  (イ)大屋墓地 昭和 5 年(1930 年)区内三か所に散在していた墓地を合併して共同墓地(写真 右下)として、自治会が管理しています。 共同墓地には三界萬霊塔、地藏尊、大乘妙典供養塔、板東百番札所めぐり成就祈塔、経塔、融通念佛供養塔、子安地藏、馬頭観音など大屋地区の古い堂や庵、千曲川渡河点入り口付近にありましたさまざまな祈りの像が移され、安置され供養されています。  (ウ)公園 上田市の都市公園として、大屋公園と上田市美穂ヶ池市民緑地があります。共に国道 18 号線より北側にあります。南側にも公園の設置を市側に要望しています。 9. 区誌 大屋には大屋区誌「年表で見る大屋の歴史」があります。この区誌は大屋が保存していた多くの古文書を研究してまとめられたものであり、昭和 48 年 8 月に大屋区誌編集委員会が発足、5 代の自治会長に引き継がれ、昭和 63 年 7 月に発刊されました。542 ページにもおよぶ大作です。大屋自治会を紹介するに当たって、参照しました。
組 織 個人名を含まない 組織図など	大屋自治会は 87 組を 4 つに分けた 4 区制としています。それぞれ 6 名の協議員を選挙によって選出し、24 人の協議員で協議員会を構成します。三役、会計監査、議長、総務委員、土木委員、衛生委員、公民館委員で協議員会を運営しています。 協議員の任期は 2 年です。令和 3 年度の協議員の平均年齢は 66 才、令和 4 年度は 63 才です。

	組長任期は1年です。
主な行事	10. 大屋の行事 昭和40・50年代は大屋商工振興会による春・秋の売り出し、えびす講と暮れの大売り出しと大屋の商店街は賑わい、活気がありました。特にお盆の「大屋商工会花火大会」「灯笼流し」には他の地域からも大勢の見物人が集まりました。 しかし商店街のお客は上田市街へと移り、商店街の勢いは失われ、大屋商工振興会による行事はなくなりました。 今は自治会主催の行事と個別の組織、住民による行事が行われています。 ① 自治会主催の行事 住民の親睦を図るために5月に区民ふれあい祭り、8月に区民盆踊り大会、9月に敬老会、12月にふれあい餅つき大会を行っています。令和3年は新型コロナウイルス禍により中止されています。 ② 大屋節分追儼式 60年以上続いている行事で節分の日に行われています。青年部の皆さんは七福神、赤鬼・青鬼になり、穂見神社で式典を執り行い、(写真 右) 七福神は豆まきにより鬼退治をしながら区内を練り歩きます。最後は大屋神社で豆まきをします。 住民、商店、企業など練り歩き先の皆さんは楽しみにしています。子どもたちは鬼が怖くて、泣く子もいますが御供の豆を食べて元気に育ちます。 ③ どんと焼きと初午 大屋内の各地区で行われていましたどんと焼き(1月)、初午(2月)の行事も行う地区は少なくなりました。瀬沢地区は「瀬沢道祖神保存会」が主催して行っています。(写真 右) ④ 梨の木の水神祭 6月、雨ごい地藏尊を水神様として、お供え物を供え、盛大な「水神祭」が行われています。
第一次避難場所	施設名 大屋公民館 住 所 上田市大屋503 注) この建物は耐震性がありません。また上田市の千曲川災害ハザードマップでは5mから10mの浸水域となっています。 上田市指定避難所 ・トウトク会館(土砂災害・洪水災害) ・神川地区公民館(土砂災害・洪水災害・地震災害)



防犯・防災	・大屋自治会災害緊急時避難連絡網 ・大屋自治会災害予知マップ ・大雨・洪水避難支援制度 それぞれ整備し毎年度更新し承知を図っています。
安 全 安協のとりくみなど	交通安全週間に大屋交差点で安全指導を行っています。
環 境 資源回収情報など	資源回収ステーションが8か所あります。 小学校PTA、中学校PTA、神社係、仁王尊保存会、社会福祉協・まゆの会と各団体 のご協力で設置しています。 月一回の回収日を衛生委員が回覧で周知しルールが守られているか巡視しています。
そ の 他 分館・育成会・消防・敬老会・AED設置場所など	大屋自治会連絡協議会が大屋の各組織と連携し自治会運営の円滑化を図っています。各組織は以下の通りです。 大屋自治会協議員会、大屋商工振興会、大屋青年部、神川小学校PTA大屋支部、第一中学校大屋支部、三養会、大屋神社委員会、安協大屋支部、消防団第10分団第1班、消防予備隊、民生委員、大屋地域福祉協会、健康推進委員、まゆの会 AEDは大屋自治会公民館に設置しています。